

# 花散里巻の中川女宿の垣根より

徳岡 涼

はじめに

朧月夜との密会が露見し右大臣方から圧力がかけられ、源氏が須磨に左遷される運びとなるその直前におかれる短い間奏曲とでもいふべきこの花散里巻は、実はなかなか手の込んだ巻であると思われる。

近時、神野藤昭夫氏〔1〕によつて和歌表現からの発想を探る試みがなされておりその方面からの研究はほぼ尽くされた感もあるのだが、実は未だ解明されてこなかった一つの不思議な事柄がある。

夏鳥であるほととぎすに誘われるかのように、花散里も住む麗景殿女御の邸を訪ねる源氏であったが、まっすぐに麗景殿女御の邸を訪れたわけではなかった。五月雨の晴れ間に、女御を訪ねる途中、中川のあたりで昔の愛人の家に立ち寄る。その女の住む宿の「垣根」が鍵語である。

先ずは中川の女への源氏からの贈歌である。

おち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に  
〔新大系一〕三九六頁

つぎに、中川女の宿を去るときに惟光の言葉、

「よし／＼、うへし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心には、ねたうもあはれにも思けり。  
〔同〕

麗景殿女御の邸において、さっきの中川の女の宿のほととぎすが鳴いていたとする場面。

郭公、ありつる垣根のにや、おなじ声にうち鳴く。慕ひ来にけるよ、とおぼさるゝほども、艶なりかし。  
〔同〕三九七頁

巻の終わりに、

ありつる垣根も、さやうにてありさま変はりたるあたりなりけり。  
〔同〕三九九頁

とあるのである。この短い巻の中で中川の女の宿の「垣根」を指し示す頻度には目をひくものがある。

和歌の世界においては、ほととぎすに組み合わせられる垣

根といえは卯の花の垣根が常套であるにかかわらず、花散里巻ではそのように明示されることはないのである。

このように考えてみると、源氏の贈歌は特異だといえる。例えば、その前後に卯の花云々への言及があれば問題は無いのだが、歌にも卯の花を詠み込まずに「ほととぎすのほの語らひし垣根」ということには何か理由があるに違いない。

この源氏歌については吉見健夫氏<sup>②</sup>が、「おち返り」という歌語が特殊であることから『拾遺和歌集』の

定文が家の歌合に

躬恒

郭公をちかへり鳴けうなひ子がうちたれ髪の五月雨の

空

(二一六)

に拠るものであることを指摘し、「ほととぎす」に「垣根」が取り合わされることについては、『実方集』の

ものいひける人のほどへてありけるに四月ばかりに  
かくいひける

卯花の垣根がくれのほととぎすわが忍びねのいづれば  
どへぬ (二九九『実方集』)

返し

人しれず垣根がくれのほととぎすことかたらひて鳴か  
ぬ夜ぞなき (三〇〇)

などを掲げて「源氏の歌の表現は語句のみでなく内容的に

も共通する点がみられるが、源氏の歌の表現はこのようにやや特異な語句を利用し、当時の読者に新味な印象を与えたものである。」とされ、中川女の返歌、

ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおぼつかなさみ  
だれの空 (『新大系一』三九六頁)

が、先の躬恒歌の語句を頭尾に、利用しつつ『古今集』の、  
題しらず よみ人しらず

去年の夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのか  
はらぬ (二一五九)

を踏まえていると述べられた。その上で、

昔を思い起こしてありふれた求愛をする源氏とそれを辛辣に拒絶する中川の女との贈答は、種々の語句の工夫が示されながらも基本的には類型的な発想の範囲を出ることはなく、両者の関係は、その延長に漠然と推測される程度で独自なあり方は具体的になにも明らかにされない。

と見られる。『拾遺集』の躬恒歌、及び『古今集』一五九番歌が踏まえられていることは首肯できるのだが、源氏歌にはどこにも「卯の花」の垣根とは描かれていない。そのことこそを本稿では問題としてみたい

どのような理由のもとにこの垣根が設定されたのだろうか。この垣根の謎を探ることは、ひいては和歌文学におけ

る、あるいは同時代文学との関わりにおける『源氏物語』の在り方を知ることにはかならないと思われる。

## 一、『源氏物語』の卯の花とほととぎす

考察に入る前に、花散里巻以外の『源氏物語』内部における卯の花とほととぎすの登場の仕方を見ておく必要がある。

『源氏物語』での卯の花の登場は、乙女巻の夏の町の垣根が早い。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の陰によれり。  
前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、小高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、むかしおほゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花くさぐさを植へて、春秋の木草、その中にうちませたり。

(「少女」『新大系二』三三三〜四頁)

次に柏木没後、夕霧は一条の宮邸にたびたび供物や消息をするがその一条の宮邸の様子に、

かの一条の宮にも、常にとぶらひ聞こへ給。卯月ばかりの卯花はそこはかとなう心ちよげに、一つ色なる四方の梢をかしう見えわたるを、もの思ふ宿はよろづ

のことにつけて静かに心ぼそく、暮らしかね給に、例の渡り給へり。  
(「柏木」『新大系四』三九頁)

と叙される。一方、ほととぎすは、これは問題としている花散里巻が早く、次に蛩巻に、蛩兵部卿宮が玉鬘の姿を蛩の光でとらえたものの思いを遂げられず苦しい贈答歌を交わした直後に、

ほととぎすなど必ずうち鳴きけむかし、うるさければこそ聞きもとめぬ。  
(「蛩」『新大系二』四三二頁)

とこのような時にはほととぎすがきつと鳴いただろう、と、省筆してしまふ箇所に見いだされる。

あるいは、幻巻で紫の上を追慕する源氏と夕霧との贈答歌の場面に、

何事につけても、忍びがたき御心よはさのつゝましくて、過ぎにしこといたうもの給出でぬに、待たれる山ほととぎすほのかにうち鳴きたるも、いかに知りてか、と聞くひとたゞならず。

亡き人をしのぶるよひのむら雨にぬれてや来つる山ほととぎす

とて、いとゞ空をながめ給ふ。大将、

ほととぎす君につてなんふるさとの花たち花はいまぞ盛りと  
(「幻」『新大系四』二〇一頁)

とあり、ほととぎすを死後の国からの使いであるとみなし

た歌だがここでも懐旧のモチーフとして花橘が取り合わされる。

なお、宇治十帖に至つて蜻蛉巻で、浮舟失踪後、四月になり浮舟を京に迎えるはずであった薫は、北の宮（二条院）に滞在中であつた匂宮に歌を贈る場面にもある。

月立ちて、けふぞ渡らましとおぼし出で給日の夕暮、  
いとものはれなり。御前近き橘の香のなつかしきに、  
ほととぎすの二声ばかり鳴きてわたる。「宿に通はば」  
とひとりごち給も飽かねば、北の宮に、こゝに渡り給  
日なりければ、立花をおらせて聞こえ賜。

忍び音や君もなくらむかひもなき死出のたおさに心  
かよはば

宮は、女君の御さまのいとよく似たるを、あはれとお  
ぼして、二ところながめ給おりなりけり。けしきある  
文かなと見給て、

橘のかほるあたりは郭公心してこそなくべかりけれ  
わづらはし。

と書き給。 (「蜻蛉」『新大系五』二八〇頁)

このように、『源氏物語』内部では、卯の花とほととぎすといふ取り合わせは避けられ、おのおのが単独で用いられるか、あるいは、ほととぎすと橘との取り合わせで用いられていることがわかる。これは和歌史の方面からはどのよう

に位置づけられる事柄なのであるうか。花散里巻の不思議な垣根とあわせてこのことについても考えてゆきたいと思ふ。

## 二、ほととぎすと卯の花の垣根について

### ― 勅撰集を中心に

ほととぎすが垣根で鳴く場合、それは卯の花の垣根である。という常套的な表現はどのようにして確立されていったのであろうか。

ほととぎすと花の取り合わせについて工藤重矩氏(註)は『万葉集』から卯の花とほととぎすの取り合わせは十例ほど見いだすことが出来るとされるが、もう少し詳しく見てゆくと、

うのはなも 宇能花毛  
きなきとよもす 未開者  
来鳴令響 霍公鳥 佐保乃山辺  
(一四七七)

さつきやま 五月山  
またなめかも 宇能花月夜  
又鳴鴨 霍公鳥 雖聞不飽  
(一九五三)

うのはなの 宇能花乃  
ちらまくおしみ 散卷惜  
ほととぎす 霍公鳥  
のいでやまにいり 野山出入

来鳴令響きなきとよもす

(一九五七)

のように単に卯の花を詠み込んだものが殆どで、それが垣根として詠まれるのは、

鶯之うぐいすの 往来垣根乃かよみかきねの 宇能花之うのはなの 厭事有哉うきことあれや

君之不きみがき 来座まささぬ

(一九八八)

のみである。季節も、一九五三番歌に見るように五月山の卯の花月夜にほととぎすを取り合わせた歌も一首あり、後述するような卯の花を初夏の花と限定する認識はなく、夏期に咲く花として、卯の花を詠んでいるようである。

次に、勅撰和歌集から辿っておきたい。

『古今和歌集』では、

郭公の鳴きけるを聞きて、よめる

躬恒

ほととぎす我とはなしに卯花の憂き世中になきわたる

覧 (二六四)

卯の花にほととぎすという組み合わせは右のように見いだせるがそれは垣根として詠まれているわけではない。

しかしながら、『後撰和歌集』に至ると、一四八番歌からほととぎすの歌群には卯の花の垣根が詠まれ、時間を追って詠み継がれる。

卯花の咲けるかきねの月きよみ寝ず聞けとや鳴くほととぎす (二四八)

四月許、友だちの住み侍ける所近く侍て、かならず消息つかはしてむと待ちけるに、音なく侍ければ

郭公来ぬるかきねは近ながら待ち遠にのみ声のきこえぬ (二四九)

返し (二四九)

ほととぎす声待つほどは遠からでしのびに鳴くを聞かぬなる覧 (二五〇)

もの言ひかはし侍ける人のつれなく侍ければ、その

家のかきねの卯花を折りて、言ひ入れて侍ける

うらめしき君が垣根の卯花はうしと見つゝも猶たのむ哉 (二五一)

返し (二五一)

うき物と思ひ知りなば卯花の咲けるかきねもたづねざらまし (二五二)

一五三番から一五五番歌までは卯の花の垣根のその白さを歌い、次の一五六番歌で歌い収める。

鳴わびぬいづちかゆかん郭公猶卯花の影は離れじ

ここで注意したいのは、一四九及び一五〇番歌のようにどこにも「卯の花」という歌語は用いられないがその前後を、つまり一四八番歌及び一五一及び一五二番歌の「卯の花」

の垣根を詠んだ歌に挟まれて、ほととぎすが飛来する垣根を詠んだ場合、それは自ずと「卯の花」の垣根であったと理解されているということである。

これは『新大系』脚注が「一四九・一五一〜一五五のよ」に「卯花」は「垣根」に植えられることが多かった」とみていることからわかるが、時間の流れに沿って編まれる勅撰集にあつて「四月」に詠まれるほととぎすの歌で垣根が詠まれる場合、あるいは花が詠まれる場合それは「卯花」と了解されていたということなのであろう。

『拾遺和歌集』はいかがであらうか。

夏の部の二首目から卯の花が詠まれ始める。

屏風に

順

我が宿の垣根や春を隔つらん夏来にけりと見ゆる卯花

(八〇)

この順の歌は「初夏の代表的な景物である卯の花の垣根が、春を隔てて、夏をもたらす」(『新大系』)ことを詠んでいるが、卯の花が垣根として好まれていた理由がほのみにえてくる歌である。

『拾遺集』ではこの直後に衣替えの歌があり、藤の花の歌が続く、八九番歌から卯の花の垣根の歌が見えてくる。

山里の卯花に鶯の鳴き侍りけるを 平公誠

卯花を散りに梅にまがへてや夏の垣根に鶯の鳴く

(八九)

八〇番歌に続いて卯花が散るのを梅に見まがえて鶯が鳴くという歌だが、卯の花は夏の盛りの花ではなく、初夏の花として認識されていたことがわかる。

渡邊道子氏が六条院の夏の町に植えられた花を考察された際に「卯の花の垣根」を取り上げられた。それは、『拾遺集』の九一番歌からの歌群で、卯の花の白さが御幣に譬えられるというものであった。貫之歌、

神まつる宿の卯花白妙の御幣かとぞあやまたれける

(九二)

は、氏が述べられるように、「白い色との連想もあつて、四月の神祭に関連して詠まれることも多かった」のである。

このように清浄の美を有する側面もあるのだが、相変わらぬ九四番歌のように垣根として好まれている。

時分かず降れる雪かと思見るまでに垣根もたわに咲ける

卯花 (九四)

しかしながら『拾遺集』の夏の部の中にはほととぎすが飛来する卯の花の垣根の様子が詠まれたものは一首もない。一〇七一番、つまり雑春の部において、先の『万葉集』と同歌の

題知らず

人麻

郭公通ふ垣根の卯花のうきことあれや君が来まさぬ

が見いだされるのみである。

夏の部に再び戻って、ほととぎすの鳴き初めるのを待ちわび、その一声に一喜一憂する歌にしばらくつきあつていると、五月雨が降り、菖蒲草が配され、ようやく一二番歌に至つて、

誰が袖に思よそへて郭公花橘の枝に鳴くらん

よみ人しらす

が歌われ、夏の盛りを迎えるのである。この歌は、神野藤昭夫氏が、源氏の麗景殿の女御への贈歌「橘の香となつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」を検討される際に、

いったい三者（「ほととぎす」「たちばな」「はなちるさ」と）が詠み込まれている例は、数多くないが、「たちばな（はなたちばな）」と「ほととぎす（やまほととぎす）」をともに歌い込んだ例は、『万葉集』歌に圧倒的に多く、「たちばな」「ほととぎす」との観念連合が、特定の引歌というよりも和歌的発想の伝統が深々とした流れの中で培われているものであることを押さえておきたい。

として、補注に掲げられた歌なのである。

以上のように、勅撰集の夏の部を追ってきたが、卯の花

の垣根が詠まれるのは『後撰集』が早く、卯の花は初夏の景物（「四月」と言い換えてもいいだろう）として認知されていたことがわかる。

そして『拾遺集』でも卯の花は初夏の景物として変わらずに親しまれており、卯の花の垣根とほととぎすの組み合わせは雑の部には一首存するものの、夏の部には存在しないことがわかる。勅撰和歌集においてもこのような相違がある。従つて、一節で見たような卯の花の垣根とほととぎすの組み合わせを有さない『源氏物語』の在り方は、より『拾遺集』に近いということになる。

さて、ここに花散里巻が五月雨の晴れ間をぬつての忍び歩きであつたことを想起しなければならない。

御おとうとの三の君、内わたりにてはかなうほのめき給ひしなごりの、例の御心なればさすがに忘れもはて給はず、わざとももてなし給はぬに、人の御心をのみ尽くしはて給ふべかめるをも、このごろ残ることなくおぼし乱るゝよのあはれのくさはひには、思ひ出で給には忍びがたくて、さみだれの空めづらしく晴れたる雲間に渡り給。（『花散里』『新大系一』三九五頁）

この花散里巻は夏の盛りの出来事であるために、初夏―四月の景物とされる卯の花は除外されているのである。

しかしながら、このことは最初に提起した問いである中

川女の宿の垣根に卯の花が描かれないことの答えにはなるかもしれないが、なぜ「垣根」とだけ記されるかの答えにはなっていない。問題は、換言すれば、五月になにかの垣根でほととぎすが鳴くという趣向がなぜ撰ばれたかということになる。

節を改め今度は私家集の世界を探ってみたい。

### 三、ほととぎすと卯の花の垣根について

#### — 私家集を中心に

ほととぎすはやはり私家集にあっても、以下のように、卯の花の垣根に鳴くものとして詠み継がれてきたようである。

師氏の家集である『海人手古良集』の「夏」に、

卯の花のさかりになれば郭公夜ぶかきねにぞ有明の月

(四九)

とあり、あるいは『小大君集』にも、

御扇のぬひ物したるを持たせ給うて、これ見よと仰  
せられ賜はせたるをみれば、ほととぎすの卯の花く  
ひていくかたあり、ただにやはとて

垣根出づるたよりにくへる卯の花をしむとこゑもたて  
ぬなるべし

これを実方の朝臣に給はせられたれば

ほととぎす鳴くにし散らば卯の花の垣根ながらに聞く  
べかりける (七六・七七『小大君集』)

とあるのが見いだされる。

実方は、本稿の冒頭部分に引いたように、ことにほととぎすと卯の花の垣根の取り合わせの歌を多く残しているが、

為任の弁、しのびたるところより、あしたに、

たが里にいかにしのおぞほととぎすおのが垣根は花や  
散りにし (七〇『実方集』)

は、季節の明示がないけれども、ほととぎすに「垣根の花」  
が取り合わされるときには、「卯の花」と見たいところであ  
り『新大系』でも「ほととぎすよ、誰の里で、どんな風に  
忍び音で鳴いているのか。自分の垣根の卯の花は散ってし  
まったのか。」と卯の花と理解している。

あるいは、同家集には次のような連歌も残されている。

八月ばかり、月あかき夜、花山院ひが歌よまむと仰  
せられて

秋の夜に山ほととぎす鳴かませば (六八 a)

と仰せらるゝに

垣根の月や花と見えまし (六八 b)

「ひが歌」、つまり理屈に合わぬ歌として「秋の山に山ほと  
とぎすが、もし鳴いたなら」と花山院が仰せられ「垣根に



ふり注ぐ秋の月影が、それこそ、初夏の卯の花とみえましようか」とする。これは『後撰集』の

時わかず月か雪かと見るまでにかきねのまゝに映ける  
卯の花 (一五五)

をもとにしたものだが、垣根が卯の花であるという了解がなければ成立しないものである。

一方で、歌語の上では卯の花以外の垣根にほととぎすを取り合わされる例が見いだされはじめる。

『和泉式部集』(岩波文庫)の

同じ僧都(稿者注・小幡僧都)の母の許に、故内侍  
ともことも(ともろともに)の誤カ(同文庫補注)卯  
の花見しことなどいひやりたれば

時鳥なき陰にても故郷の苔の垣根をいかに恋ふらん

かへし

故郷の垣根にのみぞわれは泣く死出の田長はとぐらひ  
もせず (四九八)

あるいは『大斎院前御集』の

四月、禊ぎの夜、川原にて、神のいたう鳴りけれ  
ば、右近の君の乗りたる車に、いひやる。進

常よりも禊ぎを神の受くればやなりぬつらの空に見ゆ  
らむ (七一)

右近

川神も現れて鳴る御手洗に思はむことをみな禊ぎせ  
よ (七二)

実方の兵衛の佐、車のもとに立ちよりて、ものなど  
いふ

流れても語らひはてじほととぎす影みたらしの川とこ  
そ見め (七三)

兵衛の佐  
よそにても偲ぶる声はほととぎす祈る齋垣の垣根ばか  
りを (七四)

とがある。『和泉式部集』四九七番歌の「苔の垣根」、『大斎院前御集』七四番歌の「齋垣の垣根」とあり、「卯の花」とは詠まれない。しかしそれが卯の花を暗示していることは、それぞれの詞書き「卯の花見しこと」「四月、禊ぎの夜」から推すことが出来る仕組みになっている。

また、『匡衡集』には、

按察大納言どののさぶらひにて、郭公まつ心を、  
人々よみしに

卯花のかきねならでもほととぎすこころのうちのまつ  
になかなむ (一一)

の例があり「(こころのうちの)まつ」に、ほととぎすが取り合わされるものの、「卯花のかきね」ならでも」という

前提がある。以上のようにほととぎすに取り合わされる植物の表現の多様化が進んでいるものの、やはりどこかで「卯の花」を意識した上でのことであることが、その詞書や歌意から見て取れる。

多様化に従わないものももちろん見いだすことが出来る。

『伊勢大輔集』の「麗景殿の女御の御絵合に」の「鶴」に続く連作の一首である

卯の花の咲ける垣根は白波の竜田の川の堰とぞ見る

(一一一)

『和泉式部集』にも

卯の花見にいきて、帰りてつとめて

折生まれきのふ垣根の花を見てけふ聞くものか山郭公

(五四三)

のように存在する。

このような私家集の傾向からみると「卯の花の垣根に鳴くほととぎす」を詠んだ初夏の歌を夏の部に有さない『拾遺集』の在り方は同時代の和歌史の中にあつて一線を画しているといえよう。

その『拾遺集』の季節感に厳格と云つていいほど忠実であつたのが『源氏物語』ということになるのだが、源氏歌のように、五月になにかの垣根にほととぎすが鳴くという趣向の歌はやはり一首もない。これは、和歌史の傾向から

はずれた所にその理由が求められるのではないかと推される。

#### 四、「しでのたをさ」異名から見た場合

その前に、ほととぎすには、しでのたをさ、うなる鳥、いもせ鳥、あやめ鳥、早苗鳥、くきらという異名があることから、その方面からの考察もしなければ正確な理解にはならないであろう。王朝和歌に見いだされる「しでのたをさ」や「早苗鳥」をこの節では考察しておきたい。

しでのたをさに関しては、既に浅井ちひろ氏<sup>⑤</sup>が蜻蛉巻の薫歌を考察される際に、勅撰集、私家集から掲げているので詳しくは氏の論に拠りたい。勅撰集では『古今集』の

いくばくの田を作ればか郭公しでのたをさを朝なく

よぶ 藤原敏行朝臣 (一〇二三・雑躰『古今集』)

のみだ、とのことで、このように田植えと結びつけて詠まれるのは、夙に、片桐洋一氏<sup>⑥</sup>が述べられたように、「死出田長」と解し、「死出の山」を越えて田植えを督励しに来る鳥と見ていた」ことに拠る。それが冥土の鳥として詠まれたのは、伊勢が、宇多天皇の皇子を亡くして詠んだ、

生み奉りたりける親王の亡くなりて又の年、郭公を

聞きて

しでの山越えて来つらん郭公恋しき人の上語らなん

(一三〇七・哀傷『拾遺集』)

にその想の源がある。さてそれはそれとして、「しでのたをさ」を約めて「しでたをさ」とする例に以下のものが『大齋院前御集』にあらたに見いだされた。

四日渡殿前に、苗引かせ給ひて、植ゑさせ給ふ。卯の花を垣根にわたして、をかしきさまにしわたしたり。馬

死出田長垣根に鳴かむ声きかば守る山がつも静心あら

じ (二五四)

進

根ならで人の田の実を引くところ早苗取りとはいふべ

かりけれ (二五五)

詞書きの中の四日とは、寛和元年(永観三年・九八五)五月四日のことと見られる。とするならば五月に卯の花の垣根を詠み、さらに死出田長一ほととぎすをとりあわせた希有な例ということになる。

意味が難解だが、大齋院選子が、御前で苗を引かせ、それを植えさせた上で、周りに卯の花の垣根をわたした。そこで馬(馬内侍)が詠んだのが、「死出田長は卯の花の垣根鳴くであらう声を聞くならば、早苗を守る山がつも、早苗を

取られはしまいかと心穏やかではない」というのである。

それに大して進が、「根ではなくて田の実を引く」と詠む。

「根」と「田の実(稲)」が対照させられていることから、これは「早苗」を「根」と言い換えているのだと思われる。つまり、「ちがう、ちがう」早苗ではなく人の田の実(稲)を(さつさと)引くのをこそ、「早苗鳥」といふべきなのでした」といつているのだろう。これには、

田のほとりにかりする人あり

さなへとりおのがつくらぬ秋の田をかりにきぬとや田

ぬしとがめむ (三四『惠慶法師集』)

のように、早苗鳥は自分では作らない秋の田(稲)を刈るのだという側面もあつたことが馬や進の歌の理解には必要なようである。

あるいは、『大齋院前御集』には、以下のように、五月の卯の花に鳴くほととぎすの例が見いだされる。

五月五日、衛門の乳母、ほととぎすと書きつけて、

若人たち、これにやがてようつけ給へ、とあれば、

宰相

卯の花かげに鳴きつるに今や梢に声を聞くらむ

(二五二)

馬

曇らはしとは鳴くなれど五月を浅みさみだれるかな

進

(一五二)

五月雨月になりぬれば夜いたりては鳴かむとすらむ

(一五三)

ほととぎすは四月中は卯の花の陰に鳴いていたが、いまは梢に鳴いている声を聞いているのではないか、という。よくよくこの詞書や馬の歌を見てみると、五月に入つて未だ日の浅い時候をとらえた歌であることがわかる。

先に掲げた一五四・一五五番歌が五月四日であつたということをあわせて考えてみると、卯の花にほととぎすを取り合わせることでできる時期の限度である五月の初旬に、ほととぎすの歌を詠んでいるということになる。つまり、『大斎院前御集』のほととぎすの扱いは和歌文学の背景を意識しつつも、独自の様相を呈しているといえよう。

ここには『源氏物語』との直接の関係は見いだせないが、「ほととぎす」と「卯の花」の組み合わせには、その時節を意識した、実に繊細な感性が働いた時代であつたことが見て取れる。はからずも同時代文学との関わりを考えることになつてきたが、いま一つ考察しておきたい文学がある。それは『枕草子』である。

## 五、『枕草子』のほととぎす

清少納言がほととぎすを好んだことは『枕草子』に明快である。

「木の花は」の段に

四月のつごもり五月のついたちの比ほひ、橘の葉のこく青きに、花のいとしろうさきたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、よになう心あるさまにおかし。花のなかより、こがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたる、あさばらけの桜におとらず。郭公のよすがとさへ思へばにや、猶こさらにいふべうもあらず。

(三四段『新大系』五〇頁、『新大系』は三巻本一類の陽明文庫本を底本とする。)

と橘を「郭公のよすが」とみるのは和歌の世界からの発想である。藤本宗利氏<sup>①</sup>が以下のような指摘をしているのが注目される。

一目瞭然であるのは、葉の青・花の白・果実の黄金色と色彩表現を重ねることで、鮮明な絵画的印象を与えている点である。これが漢詩の対句表現を思わせる表現であることも、また疑問の余地がない。読者によつては、具平親王の「枝繁金鈴春雨後 花薰紫麝凱

風程」という詩句を、連想したかもしれない。

だが同時にこの表現が、当時の通年的な橘の心象に照らして、明らかな欠落を抱え込んでいることに気づかざるを得まい。それは香気への沈黙である。なぜなら同時代人にとつての橘の心象はあまりにも有名な古今集の

五月待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞす  
る  
（夏・一三九）

という一首と、無縁にはありえなかつたからである。

この段で橘の香りを消し去つたことと、花散里巻において主軸として描かれる花散里との邂逅の場面で用いられるほととぎすと橘の香りのモチーフの扱いは対照的だといえる。藤本氏の指摘するように色彩をちりばめた橘の表現こそが『枕草子』の非凡さなのである。

次に「鳥は」の段に、鶯について言及した後続くくだりを挙げておきたい。

郭公は猶、さらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯花、花橘などにやどりして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへ也。五月雨のみじかき夜に寢覚をして、いかで人よりさきに聞かんとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑの、らうくじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。

六月に成ぬれば、おとせすなりぬる、すべていふもをろか也。  
（三八段『新大系』五九〜六〇頁）

とする。

この段には卯花と花橘とほととぎすの組み合わせが見られるが、何故か先に見た「木の花は」に見られるような非凡な表現は見られず和歌表現の延長に終始している。

この「鳥は」の段に関して、『枕草子』前田家本の研究を進める磯山直子氏<sup>3)</sup>によつて、前田家本にはほととぎすの項目が独立して存在していないことから、以下のように論じられている事は見逃せない。

前田家本編者は、項目の採録態度としては、項目をより増補させていく傾向にあつた。編纂時に参照し得た堺本・能因本いずれかの写本に「郭公」が存在していたならば、当然採用していたであらう。「郭公」を採用していないということは、前田家本編纂時、つまり平安後期から鎌倉初期と推測できる時期には、「郭公」という項目が存在していなかつた可能性が高いと考える。このことはさらに、清少納言が、枕草子の『鳥は』という章段内に、特に一つの項目としては「郭公」を記していなかつた可能性を秘めているのではなからうか。「郭公」は、枕草子の中でも多く言及され、清少納言が愛した鳥として有名である。そのことを前提とし

て、後人が「郭公」という項目を『鳥は』の章段に増補したのではなからうか。

その前田家本のほととぎすのくだりを引いておきたい。

ほととぎすは、あさましう待たれて、夜うち待ち出でられたる心ばへこそいみじうめでたけれ。六月などには、まことにおともせぬが、雀などのようにあるものならば、うぐひすもさしもおほゆまじ。春の鳥とたちかへるより待たるものなれば、まほ思はずなるはくちをし人げなき人をば、しる人やはある。鳥のなかにも、鳥・鶯などのこゑをば耳に聞き入れずかし。うぐひすは、ふみなどに作りたれど、心ゆかぬこちす。

〔前田家本枕冊子新註〕三三二―三三三頁)

と鶯の延長にとりあげられていて、比重の置き方が他の諸本に比べて軽いことがわかる。

前田家本の描写の方が実は原型であったのだとおぼしい。今、この箇所はひとまず措いて次を見てみたいと思う。

賀茂へまいる道で田植えをする人の言葉に嘆き、時鳥は鶯におとると言う人を憎く思う以下の記述は偏愛の感ささ有る。

…いかなるにかあらむ、おかしとみゆるほどに、時鳥をいとなめう歌ふ。聞くにぞ心うき。「ほととぎす、をれ、かやつよ、をれなきてこそ、我は田植ふれ」と

歌ふを聞くも、いかなる人か「いたくななきそ」とはいひけん。仲忠が童生ひいひをとす人と、時鳥鶯におとるといふ人こそ、いとつらうにくけれ。

(二〇九段『新大系』二五五頁)

この段は前田家本には見られないことから、本来的なものか否かが疑問だが、従来、清少納言の時鳥への偏愛を示す段としてよく引き合いに出された段ではある。以上のような本文の不安定さを有する段ではなく、比較的安定した本文の段にほととぎすとの関わりを描いた段がある。

それは、定子後宮の女房たちの定子との、あるいは殿上人との機知に富んだやり取りを記す日記的章段のなかの、「五月の御精進のほど、職におはします比」の段である。

この段はほととぎすを歌に詠むことを名目に松が崎に清少納言一行が五月五日―五月雨の中に出かける。しかし、一首も詠むことなく明順の朝臣の家で歌いながら稲をひく農民を見物し、山菜料理に舌鼓を打ちして過ごすのだが、「雨ふりぬ」の言葉に促され帰路につく。その帰路の描写が楽しい。(前田家本)もほぼ同じ描写である。)

卯の花のいみじう咲きたるをおりて、車の簾、かたはらなどにさしあまりて、をそひ、むねなどに、ながき枝を葺たるやうにさしたれば、只卯花の垣ねを牛にかけたるぞと見ゆる。供なるおのことも、いみじう

笑ひつゝ、「いまだし、く」とさしあへり。

(九五段『新大系』一一一九頁)

卯の花を牛車のあちこちにさして、それが卯の花の垣根を牛にかけたようだという、このはしやぎようは極めて印象的だけれども、卯の花を五月の景物として扱うことは、和歌の世界の四季の区分からは逸脱してしまつていたのである。

しかしながら、その逸脱には自然の在り方に密着している実感がこもつてるように思われる。

月が改まつたからといって、卯の花が全く咲かなくなるはずはない。自然観察の實際に即して生き生きと文章を記すことこそ共感を誘うものである、という清少納言の姿勢が見て取れる。そして、紫式部もまたそのことを熟知していたのだろう。

そこで、花散里巻における、五月二十日の。五月雨の晴れ間の忍び歩きの物語の導入に、ほととぎすと「卯の花を伏せた垣根」の中川女の物語を語り、ほととぎすと花橘を配した花散里物語を展開したのである。卯の花とは書かないが、垣根、垣根と何度も繰り返して、それがあたかも卯の花であるかのような痕跡を残したあたりに、どこかしら『枕草子』への振れた共感が感じられる。そして、それは、『拾遺集』の在り方に従うことにもなったのである。

むすび

冒頭に、「花散里巻は、実はなかなか手の込んだ巻であると思われる。」と記した。そのことをもう少し詳しく述べて本論の結びとしたい。

たとえば、先にも記したように、花散里巻は五月雨の晴れ間の出来事を描くが、一方「五月の御精進のほど」の段は、五月雨の降る最中であり、これは対照的でさえある。更に、『枕草子』では明順邸へ、花散里巻では麗景殿女御邸へ赴くそれぞれの往路の以下の描写は軌を一にしている。道も祭の比思ひ出られてをかし。

(九五段『新大系』一一八頁)

大きな桂の木のをひ風に、祭りのころおぼし出でられて、そこはかとなくけはひをかしきを、たゞ一目見たまひし宿りなりと見給。 (『新大系』三九六頁)

もつとも、後者は中川女の宿における描写なのだが、賀茂祭りを思い出しながら出歩く、という趣向が一致している。花散里巻で桂の木の「をひ風」に賀茂祭りを思い出すのは、桂の木が賀茂祭りに葵とともにかざしとして用いられるからであろう。ここには、『枕草子』の「五月の精進のほど」の段を換骨奪胎しようとする意図さえ窺える。

つまり、単に、ほととぎすに何をとりあわせるか否かと

いうことに終始するだけではなく、物語の結構にまで「五月の御精進のほど」の段を投影させつつも、それを感じさせない周到さで一つの物語となり得ているのがこの花散里巻といえる。

従来も引用という立場から、中川女宿と麗景殿女御邸の様子を対比して読み解く研究が積み重ねられ、『伊勢物語』との関係も様々に論じられ成果を収めている<sup>⑩</sup>と思われるが、執拗に示されている中川女宿の垣根、及びその周辺の描写に着目し、注意深く読み解くことによつて意外な一面が立ち現れてくるのである。

(注)

- (1) 神野藤昭夫「源氏物語の和歌的発想と表現―「花散里」巻の分析を中心に―」『源氏物語研究四』風間書房 平成十一年九月
- (2) 吉見健夫「花散里巻の和歌―源氏物語の歌物語的方法について―」『中古文学論攷』平成六年二月及び「花散里巻試論―贈答歌の方法性―」『中古文学論攷』平成三年二月
- (3) 工藤重矩「古今集一四八の解釈・補考」『語文研究』(六一号 昭和六一年六月)のち「ほととぎすの季節と鳴声の和漢比較―古今和歌集一四八の解釈補考―」『平安王朝和歌漢詩文新考 継承と批判』風間書房 平成十二年
- (4) 渡邊道子「夏の町・花散里とその植物」『実践国文学』第四一号 平成四年三月

(5) 浅井ちひろ「蜻蛉巻」の四月十日の薫の歌「しでのたをさ」

をめぐって」『和歌文学研究』第八十四号平成一四年六月

(6) 片桐洋一「増訂版 歌枕・歌ことば辞典」笠間書院 平成十一年六月

(7) 藤本宗利「読者論として―鏡としての枕草子―」『国文学解釈と教材の研究』学燈社 平成八年一月

(8) 磯山直子「枕草子」本文の写本性―前田家本を中心として―『王朝文学の本質と変容 散文編』片桐洋一編 和泉書院 平成十三年二月

(9) 麗景殿女御邸での描写に「廿日の月さし出づるほどに」、『新大系一』三九七頁とある。

(10) 引用あるいは語りという立場からの論で、三谷邦明「花散里巻の方法 伊勢物語六段の扱い方を中心に」『中古文学』(昭和五〇年五月)のち『物語文学の方法Ⅱ』第九章 花散里巻の方法―(色好み)の挫折あるいは伊勢物語六十段の引用―(有精堂)及び、広田収「物語りにおける伝承と様式―伊勢物語六十段・六十二段と源氏物語花散里巻」『日本文学』(昭和六〇年四月)などがある。

\*本文の引用は断りのない限り『新大系』に拠った。また『海人手古良集』『惠慶法師集』は『新編国歌大観』に拠り、『万葉集』は『萬葉集 本文編』(瑞書房、『小大君集』『大斎院前御集』『伊勢大輔集』は『私家集注釈叢刊』(日本古典文学会)、『匡衡集』は『私家集全釈叢書』(風間書房)に拠った。